

地域肉用牛振興の核となる「キャトルステーションながと」への支援

西部家畜保健衛生所

○繁永智里・大石大樹

長門市は県内有数の肉用牛の産地である。しかしながら、近年は飼料高騰等により経営が厳しいことや農家の高齢化により、飼養戸数・頭数ともに減少が続いている。このような中、令和5年10月、繁殖農家の労力負担の軽減や、長門市の肉用牛の飼養頭数の増加・経営維持を目的とした「キャトルステーションながと」（以下CS）が設立され、運営がスタートした。家保は構想段階から運営にわたって支援してきたので、その取組を報告する。

1 取組

家保はCS設立に向けて、先進地の情報を収集して施設規模、飼料設計、預託料設定、衛生対策等について、CSの制度設計への指導・助言を実施した。CS設立後は畜産技術部と連携した毎月1回の定期検討会を開催し、体重測定・体測及び栄養度測定を実施し、給与飼料プログラムの提案を行った。また、自給飼料確保のための牧草栽培指導も行った。さらに、衛生面では飼養衛生管理基準遵守指導に加えて預託予定牛全頭に牛伝染性リンパ腫検査を実施した。CSの飼養環境改善のため、県事業を活用した飼養管理機器の導入についても支援を行った。

一方、CSを運営する法人は令和7年4月から新たに自社の繁殖牛2頭の飼養を開始した。家保は繁殖素牛の選定支援及び導入後の繁殖指導を行うとともに、地域及び県の共進会展品に向けた管理指導を行った。

2 成果

預託頭数は開設から令和7年12月現在までに45頭に達した。平均預託頭数は令和5年度の1.5頭/月から令和7年度は2頭/月に増加した。預託牛のうち、子牛市場への出荷頭数は30頭で、出荷時の日齢増体重は雌0.99kg/日、去勢1.14kg/日であり、直近の県平均を上回った。また、預託農家は開設直後の1戸から9戸まで拡大した。

導入した繁殖牛2頭は、令和7年度県共進会の若牛2区において優等賞1席・2席を独占し、長門地域の肉用牛の改良に大きく貢献した。

3 今後の展望

CSは運営開始から2年が経過した。預託牛の発育成績は安定しており、預託農家から高い評価を得られている。さらに、市外の畜産農家からの預託牛の希望も上がっている。今後は、預託希望頭数の増加へ対応するため、新たな預託施設の整備も検討されている。

また、県の共進会での上位入賞により地域の肉用牛振興の機運も高まりを見せている。一方、運営する法人は研修施設としての役割も担っており、地域の肉用牛担い手育成の場としても期待されている。このように多面的な機能を持ち、地域畜産振興の核となるCSの発展に向けて、支援を継続していく。